

Title	佛蘭西革命史論, 占部百太郎著
Sub Title	
Author	杉本, 芳夫(Sugimoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.3 (1923. 5) ,p.144(450)- 146(452)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230500-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

記述、倭儒國の説話等によりてネグрито漂着の事實を肯定し、而して彼等の渡來は大方黒潮によりフイリツピン群島より臺灣、沖繩諸島等を経て北上し、日本群島の或地點に上陸せしものにして、之れが年代は略ぼツングースの移住と同時に或は多の古き時代に存すとなせり。次ぎに苗族は紀元前六世紀の頃、中部支那より海を越へて北進し、日本群島の一端に上陸し、之れが生活の中心地點は九州の西海岸即ち筑後川、菊池川、白川の沖積層にして其處に彼等は農業的生活を營み稻、麻、桑を作りて生活上の資料を得しものにして、彼等が移住の動機は漢族の壓迫と共に九州方面の活火山にあくがれて來りしものゝ如しとなせり。次ぎに國史上の「隼人」族はインドネシア族にして、彼等は平安時代に至る迄日本人と同化することを得ざりしものとなし、尙ほ移動性と忍耐性とに富みし漢族が我邦に歸化せしことは秦氏及漢氏の氏名によりて明かなるのみならず、色々の説話によりて之れを知るを得るとなし、而して彼等の移住は恐らく帶方郡と日本群島との往來が頻繁なるに至りし以前のことにして、ツングース族の第三次移住と前後し、之れが移住地は九州の北端、中國の沿岸地方にして、彼等は主として農業、稀れには商業に従事して群島の文化を進めるに與かつて力ありしことは古代國語中に漢語の日本化されしもの極めて多きに徴しても之れを知るを得可しと論ぜり。

第五章「日本帝國の萌芽」の下に著者は先づ「聚落の生成と其發達」を論じて我邦古代の聚落的狀態に及び次で「皇室の勃興」「原始形の國家觀念」「法制思想の泰明」を論じ、第六章「社會組織と政治組織」の下に「家族制度の基調」「氏族制度の發達」「政府

の組織」「官房財政から國家財政へ」「土地經濟」「民衆領域の擴大」を叙し、最後に第七章「文化生活の昂揚」の下に「太陽複興文化」「文化移動線と古代交通線」「國家の成立」「移民と新文化」「日本民衆の生活理想」を論じて本著を結了せり。

本著は我邦古代史研究上吾人を啓發せしめし點多く、吾人は他日、再讀三讀の上更に著者の至教を乞はんと欲す。(阿部秀助)

佛蘭西革命史論

(占部百太郎著)
巖松堂書店發行

歴史に於ける進歩發達は、或る見地に於いて人類の解放を意味すると言つていゝ。もちろん舊套を脱したる新狀態は、他の新たな拘束であるかも知れぬ。しかしそこに吾々の欣求する理想實現の過程をみる事ができる。而して歴史上の事件にして、積極的にか消極的にか人類の解放に貢獻せざるものはないけれども、殊にこの點において著しいものは、近世紀の初頭に於けるルネサンス、即ち文藝復興と地理的大發見と宗教改革との三大事件である。中世紀の神秘的な、しかも倦怠な精神によつて支配された人類は、文藝復興によつて理性の上の解放を得た。また主として地中海と大西洋の一部に局限されたるヨーロッパ人の活動地域が地理的大發見によつて擴大され、全世界がその活動舞臺になることができた。更にローマ法王の不合理な絶対命令に抑壓されたる彼等は、宗教改革によつて心靈の上の解放を得た。かくて近世紀の幕が開かれ、彼等は新舞臺の上に新活動をなしたのである。それ

にもかゝらず彼等には猶殘されるた拘束があつた。即ち彼等は毫も政治的及び經濟的解放を得てゐなかつた、封建制度が崩解して中央集權的統一國家が形成されたけれども、依然として專制的國王、横暴なる貴族僧侶の特權階級によつて一般人民は甚しい壓迫をうけた。しかるに第十八世紀末に至つてフランスに勃發した大革命と、英國に發生したる産業革命とによつて從來の特權階級が根底より覆へされ、一般人民は始めて政治的社會的自由を獲得し、これによつて眞の意味の近世紀がひらかれた。従つてフランス革命は人類解放運動史上最大事件のひとふべきであり、従つてそれは單にフランスのみの問題ではなくして實に全人類の問題であり、殊にそれが政治的社會的革命であつただけ、それだけ驚天動地の著しい事件であつた。が不幸にもかゝる重大事件が從來我國人に十分理解されず、また理解するにも翻譯すべき邦語の好著なきを遺憾とした。しかるに今こゝに占部教授の佛蘭西革命史論を得たことは、多年の渴望を醫すべき福音として、わが學界及び一般讀書界の欣快とするところである。

一體フランス革命の研究に當つて何人にも直ちに起る疑問は、何故フランスにかゝる大革命が勃發したかといふことである。これについて著者は、(一)中央集權的なるも不統一なる王政、(二)不正なる貴族及び高級僧侶の特權、(三)非特權階級の不平不滿、(四)第十八世紀の懷疑的破壞的哲學及び文學の影響、(五)佛國當時の經濟財政の不健全なる状態、(六)米國獨立戰爭の影響をその原因としてあげ、殊に著者は(五)に最も重きを於かるゝのである。がフランス革命の原動力たる平民の境遇は無論悲惨であつ

たけれども、これを他の歐洲大陸諸國の農民に比較すれば、むしろ前者の生活状態が進歩してゐたといはれるのである。にも拘はらず大革命のフランスに勃發したのは、特にフランス人を刺戟した原因がなければならぬ。國王の專制、特權階級の驕奢に憤激して、佛國の庶民が自由、平等を絶叫したのは、畢竟するに財産分配の不公平、課税賦役の不權衡から出發したるものに外ならない。さればフランス大革命の近因、否最も痛切なる原因は、經濟上に於ける庶民の不平苦情に在つて、紊亂せる財政救済の急要と、一七八八年の凶作に因る下級社會の暴動と、會々之を勃發せしむる動機となつたのである。一方に於いて中等階級より發した國家の政治的改造に關する思想の潮流と、他方に於て農民及び労働者から發した經濟的狀態の直接且つ斷然たる改良を要求する活動の潮流とが相合して、茲に共同の目的を達成せんがため、互に提携せし結果、フランス大革命となつたとのクロボトキンの言は、評し得て肯綮に中れりと言ふべきである。(第一章革命原因) かくて第二章革命前記、第三章三族議會、第四章國民議會、第五章立法議會、第六章國民協議會、第七章對佛大同盟、第八章反動の勝利、第九章執政官政治、第十章執政官とナポレオン、第十一章結論の順序をもつて、波瀾曲折極りなき大革命の經過及びその性質を明瞭に詳述されてゐる。著者自身も言へるごとく、『内容は主として佛國大革命の史實、殊に其の政治的史實を取扱つたもので、純然たる史論のみを以て充たされて居ないのである』が、しかし革命舞臺に於ける登場人物の性格を解剖するごまにも、事件の經過を興味多く描寫するなど、頗る巧妙なる叙述によつて史實と史

論をなほよく織りなしてゐる。怯懦遲鈍の善人ルイ十六世、調和的策士ミラボー、豪快瀾達の機會主義者ダントン、熱情と細心の陰謀家ロベスピエール、果ては『佛蘭西を救ふには頭首と劍を要す』この國民の要望に應じて、終に革命を終熄せしめたる帝國主義的大野心家ナポレオン等、つぎつぎに現出する人物とその事業とは、本書によつて極めて適切に、興味多く論評されてゐる。

一體生物の進化に於いては漸進的過程をさるゝのが常であるけれども、しかもなほ時として異常突發の形をさるゝ場合がある。まして自然法則を以つて全く律することのできない人類生活に於いては、かゝる異常突發はなほさら可能性が多い。歴史上に於ける革命はすべてかゝる異常突發の現象である。而して革命は呪ふべきものが、讚美すべきものか知らないけれども、吾々の豫想を絶する事變であるだけ人類生活に大影響を與ふる重大事であつて、現代の世界史的最大事變たるロシア革命のごとき殊にさうであつた。この大事變を親しく見たる吾々は、さらに翻つて百三十年前の世界史的最大事變たるフランス革命を回顧する必要がある。殊にわが國人の一部が非常に恐れをなしてゐる多くの外來思想、例へば『サンヂカリズム』でも、ボルシエヰズムでも、マルクス主義でも、決して今度の大戦を機會として發生した產物ではないのである。是等の思想の起源は、何れも第十八世紀末の佛蘭西大革命に發生して居るのである。其れで我國に流入して、在來の思想と或は混和し、或は反撥して、所謂改造運動の動機となり、新文化の要素とならんとしてある是等の思想の由來を探らうと思へ

ば何うしても此の佛蘭西革命に遡つて研究せねばならぬ。『序文』學者も政治家も現在の特權階級も一般民衆も、その研究によつて各自その地位と使命とに就いて何等かの自覺と反省とを與へらるゝであらう。而して本書はそのフランス革命研究の最良書の一つであつて、著者はわが慶應義塾文學部史學科教授として西洋史擔當せられ、特に英國憲法史、西洋中世史、フランス革命史に造詣深き人なることを思へば、本書の價值と權威とについては喋々するを要しない。

(杉本芳夫)

哲學から教育へ

(川合眞一著
東光閣發行)

本書はかつて本誌上に於いて紹介したる『現代哲學への途』の姉妹篇ともいふべきものであつて、その所論は、『主としていばば廣い意味での哲學に屬する他の諸科の學と教育學との限界領域に關するものである。』即ち一、哲學と教育、二、文明及び文化、三、文化の問題、四、民族性と教育、五、群衆の心理と教育、六、教育の今昔、七、個人主義と團體主義、八、國家に對する現代思想の傾向、九、軍國主義と産業主義、十、新國家思想の先驅者の十篇からなる。この目次によつて明かなることく、本書は系統的教養學の書ではなくして、著者の世界觀人生觀に基き、その體驗によつて批判されたる廣き意味の教育に關する著者の見解であり、それだけわれらにとつていちぢるしい興味と多大の啓發とを與へらるゝ。『惟ふに 育なるものは、ナトルプの言つてゐた通り、全